
岩 槻 市

太田貝塚

県立岩槻商業高等学校防災拠点施設整備事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 0

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくりに」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを進めておりますが、西暦2000年をむかえ、新千年紀に向かってより一層の推進を期しております。

阪神・淡路大震災の教訓を生かすために、まち・安全彩の国構想の一環として、災害時に高齢者や障害者が優先的に避難できるよう、県立高等学校を利用した防災拠点の整備を積極的に進めています。

県立岩槻商業高等学校に計画された防災拠点施設整備事業もこの事業の一つであります。

防災拠点施設事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として、太田貝塚の一部が及んでいることが分かりました。

埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。

発掘調査については、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、狭い範囲ではありましたが、中世の井戸跡のほか溝跡、土壌などが検出されました。

特に井戸跡、溝跡などから出土した遺物は、縄文時代から古墳時代、中世、近世にまで及んでおり、当地域の歴史、特に中世から近世の遺物は埼玉県指定史跡である岩槻城跡の歴史を明らかにする上で大変貴重な発見となりました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の保護及び普及・啓発、学術研究の基礎資料として、また教育機関の参考資料として、広く活用していただければ幸いと存じます。

本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御指導・御協力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県教育局管理部財務課をはじめ、岩槻市教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年1月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

- 1 本書は埼玉県岩槻市太田1丁目4番地1他に所在する太田貝塚遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届に対する指示通知番号は、平成10年12月28日付け教文第2-166号である。
- 2 出土遺物の注記番号はOTKIDKである。
- 3 発掘調査は、県立岩槻商業高等学校に計画された防災拠点施設整備事業に伴う事前調査である。埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県教育庁管理部財務課の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査は、当事業団職員の昼間孝志、中山浩彦が担当し、平成10年12月16日から平成11年1月31日まで実施した。整理・報告書作成は、磯崎一が担当し、平成11年11月1日から平成12年1月31日まで実施した。
- 5 遺跡の基準点測量は、株式会社大宮測技に委託した。
- 6 写真は、発掘調査時の撮影を各担当者が行い、遺物の撮影は磯崎・大屋道則が行った。
- 7 出土遺物の実測、出土品の整理・図版の作成は永井いずみの協力を得て磯崎が行った。縄文土器については君島勝秀の協力を得た。
- 8 本書の執筆は、I-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、V-(2)を鈴木孝之、他を磯崎が行った。
- 9 本書の編集は、資料部資料整理第2担当の磯崎が行った。
- 10 本書に掲載した資料は、平成12年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
- 11 本書の作成に際し、岩槻市教育委員会の方々からご教示、御協力を賜った。

凡例

- 1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標点第Ⅱ区系に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位表示は、全て座標北を表す。グリッドは10m×10m方眼で設定した。グリッドの名称は方眼の北西隅の杭番号である。
- 2 本書の本文・挿図・表などにおける遺構の略号は、以下のとおりである。
SE：井戸跡 SK：土壌 SD：溝跡
- 3 本文中の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。その他のものについてはスケールで示している。
調査区全測図 1：160
土壌 1：60
溝跡 1：80
遺物実測図、土器拓影図 1：3
- 4 遺構断面図における水平値は、海拔高度を示しており単位はmである。
- 5 遺物観察表は、以下のとおりである。
口径・器高・底径はcmを単位とする。計測値が()で囲まれたものは、推定値を示す。
胎土は、土器に含まれる含有鉱物を、以下の記号で示した。
A：石英、B：長石、C：角閃石、D：赤色粒子、E：砂粒
土器の焼成は良好・普通の2段階に分けた。
- 6 本書に掲載した地形図は国土地理院発行の1/25,000地形図、岩槻市都市計画図を改図・転載したものである。

目次

序	III 遺跡の概要	8
例言	IV 遺構と遺物	9
凡例	1 遺構と遺物	9
目次	(1) 井戸跡	9
I 発掘調査の概要	(2) 土壌	9
1 調査に至る経過	(3) 溝跡	12
2 発掘調査・報告書作成の経過	(4) その他の出土遺物	16
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	V 結語	19
II 遺跡の立地と環境	引用・参考文献	21

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第6図 第1～5号土壌、第1号井戸跡出土遺物	11
第2図 周辺の遺跡	5	第7図 第1～3号溝跡	13
第3図 太田貝塚調査区位置図	7	第8図 第1～3号溝跡出土遺物	15
第4図 太田貝塚全測図	8	第9図 縄文土器、表採及び攪乱出土遺物	17
第5図 第1～6号土壌、第1号井戸跡	10		

図版目次

図版1 岩槻城周辺 (昭和22年撮影米軍写真)	第4号土壌全景
図版2 調査区全景 (北側から)	第5、6号土壌全景 (東側から)
第1号井戸跡土層断面	第1～3号溝跡全景 (西側から)
第5号土壌土層断面	第2号溝跡出土腰折れ碗
第1号溝跡土層断面	攪乱出土灯明受皿
第2号溝跡土層断面	攪乱出土カワラケ
第4号土壌、第3号溝跡土層断面	第5号土壌 (下)、攪乱 (上) 出土古銭
第1号井戸跡、第2、3号土壌全景	図版4 第2号溝跡出土染付小碗、蓋
第1号土壌全景	第1、2号溝跡出土陶器
図版3 第2、3号土壌全景	第1号井戸跡他出土中世陶器

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

阪神・淡路大震災の教訓を生かすために、まち・安全彩の国構想の一環として、災害時に高齢者や障害者が優先的に避難できるよう、県立高等学校を利用した防災拠点の整備を積極的に進めている。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県立岩槻商業高等学校に計画された防災拠点施設整備事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成10年4月17日付け教財第65号で、埼玉県教育局管理部財務課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成10年6月11日付け教文第348号で、太田貝塚の取扱いについて次のように回答した。

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と財務課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成10年12月16日から平成11年1月31日までの期間で実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

太田貝塚 平成10年12月28日付け教文第2-166号

(文化財保護課)

1 埋蔵文化財の所在

名称 (No.)	種別	時代	所在地
太田貝塚 (77-063)	集落跡	縄文、古墳、 奈良、平安、 近世	岩槻市太田地内

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

太田貝塚遺跡の発掘調査は、平成10年12月16日から平成11年1月31日にわたって実施した。調査対象面積は、350㎡であった。

12月上旬に現場事務所を設置し、重機による調査地点の表土排除、調査区域に囲構工事を実施した。中旬に基準点測量を実施し、その後、遺構確認作業を実施した。

遺構確認作業の結果、井戸跡1基、土壇6基、溝跡3条を検出した。

遺構確認作業後、各遺構について調査を開始した。各遺構を人力により掘り下げ、土層断面図、遺構平面図等の記録図面の作成、写真撮影等を行い、遺物の取り上げを行った。

全ての調査終了後、発掘によって搬出された残土の埋め戻し作業を行い、1月31日をもって調査が完了した。

整理・報告書刊行

太田貝塚遺跡の整理・報告書作成作業は、平成11年11月1日から平成12年1月31日にわたって実施した。11月上旬に出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業を行い、これと並行して、遺構実測図、写真等記録図面整理、一部遺物実測・拓本作成を実施した。

11月中旬～12月に遺物実測・拓本作成を継続して実施した。これと並行して、遺構・遺物の実測図トレース・遺物の写真撮影を行い、トレース・写真撮影終了後、報告書用版下の図版組を11月下旬に実施した。

これらの作業終了後、報告書作成のため、原稿執筆、割付の作成などを行い、1月から印刷を開始した。印刷開始後、3回の校正を経て、1月31日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成10年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進

管理部

専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美智子
主 任	腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長	谷 井 彪
調 査 部 副 部 長	水 村 孝 行
調 査 第 四 課 長	鈴 木 秀 雄
統 括 調 査 員	昼 間 孝 志
調 査 員	中 山 浩 彦

(2) 整理事業 (平成11年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子

資料部

資 料 部 長	高 橋 一 夫
専門調査員兼資料部副部長	石 岡 憲 雄
専 門 調 査 員	大 和 修
統 括 調 査 員	磯 崎 一

II 遺跡の立地と環境

太田貝塚は、東武鉄道野田線岩槻駅の東約1 kmに位置し、諏訪神社、浄源寺境内を中心とした地点貝塚である。地番は岩槻市太田1丁目4番地1他である。

遺跡は元荒川右岸の大宮台地の一支台である岩槻支台に立地し、東側には元荒川が形成した沖積地である中川低地が広がっている。

岩槻支台は東側が元荒川によって慈恩寺支台と、西側は綾瀬川によって大宮主台とに分離され、2つの河川は台地を北北西から南南東に貫き、複雑に入り組む無数の樹枝状の侵食谷を発達させている。

地形は基本的には西から東への傾斜を持ち、西縁は河川の侵食により急崖をなし、東縁は侵食谷が発達している。標高は12.0～15.0m前後である。

遺跡付近の地形は東側に元荒川に向かって開口する侵食谷が存在し、その北側に岩槻城跡の大部分が存在する舌状台地があり、南側にも新曲輪部分がの舌状台地がある。遺跡の西側は、綾瀬川方向に南側に向かって開口する谷が真浄寺付近まで延びている。

本遺跡の周辺部は、岩槻市教育委員会によって継続的に調査が行われており、縄文時代から近世岩槻城関連の時代までの遺構・遺物が検出されている。縄文時

代について「本遺跡も含め、侵食谷を取り巻く形で縄文時代前期の遺跡が分布する様相」（小林照教・青木文彦ほか1997）が予測されている。古墳時代から平安時代、中世以後についても同様に多数の遺構・遺物が調査されている。

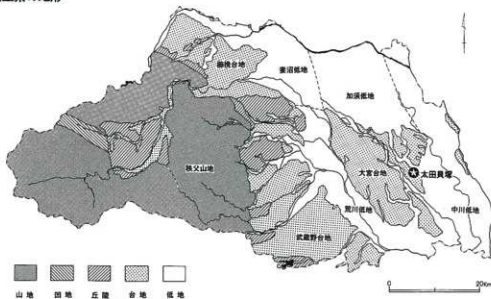
岩槻支台には多数の縄文時代の遺跡が存在し、日本考古学史に名をとどめる遺跡が数多く存在する。

「埼玉県遺跡地図」によると、縄文時代草創期の遺跡は慈恩寺支台に3遺跡確認されているが、岩槻支台では未確認である。

早期から前期にかけて遺跡数が増大し、岩槻支台上では掛貝塚(9)、杵崎貝塚(25)、飯塚貝塚(35)、浮谷貝塚(39)、西原遺跡(15)、訳山貝塚(40)等元荒川、綾瀬川沿いに遺跡が形成される。

前期になると上述の他に太田貝塚(1)、木曾貝塚(30)、村国貝塚(32)、飯塚北貝塚(34)、飯塚南貝塚(37)、南下新井番場北遺跡(36)、黒谷貝塚(44)、新曲輪遺跡(23)、加倉貝塚(21)、加倉洞雲寺境内遺跡(20)、加倉浄国寺境内遺跡(19)が加わり、支台の南端部まで遺跡が確認されている。慈恩寺支台上でも羽鳥山貝塚(49)、古ヶ場貝塚(48)、貝塚貝塚、裏慈恩

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1 太田貝塚 2 岩槻城主郭跡 3 岩槻城新曲輪部分 4 馬込三番北道跡 5 馬込三番道跡 6 つかのこし古墳 7 馬込道跡
 8 平林寺遺跡内古墳 9 掛貝塚 10 平林寺遺跡 11 金重西遺跡 12 西原三遺跡 13 箕輪東遺跡 14 箕輪貝塚 15 西原遺跡
 16 浄安寺境内古墳 17 竹たば古墳 18 加倉遺跡 19 加倉淨因寺境内遺跡 20 加倉洞雲寺境内遺跡 21 加倉貝塚 22 加倉中島遺跡
 23 新曲輪遺跡 24 城山遺跡 25 柏崎貝塚 26 真福寺貝塚 27 真福寺中道遺跡 28 真福寺中道南遺跡 29 真福寺向原遺跡
 30 木曾良貝塚 31 村国道下遺跡 32 村国貝塚 33 渋谷江崎金遺跡 34 飯塚北貝塚 35 飯塚貝塚 36 南下新井番場北道跡
 37 飯塚南貝塚 38 南下新井番場遺跡 39 浮谷貝塚 40 駒山貝塚 41 笹久保新田遺跡 42 黒谷八幡裏遺跡 43 黒谷田端前遺跡
 44 黒谷貝塚 45 七鳥遺跡 46 寺方遺跡 47 畑中遺跡 48 古ヶ塚貝塚 49 羽鳥山貝塚 50 上平遺跡 51 慈恩寺山口遺跡
 52 上山高地貝塚 53 裏慈恩寺蓮台遺跡 54 上野北遺跡 55 上野遺跡 56 慈恩寺山口南遺跡 57 上野貝塚 58 表慈恩寺西遺跡
 59 諏訪山貝塚 60 諏訪山遺跡 61 表慈恩寺東貝塚 62 桜山貝塚 63 表慈恩寺東道跡 64 南貝塚 65 徳力東道跡 66 南道跡

寺遺跡、入山高地貝塚(52)、表慈恩寺東貝塚(61)、桜山貝塚(62)、諏訪山貝塚(59)、上野貝塚(57)、南遺跡(64)等がある。綾瀬川を挟んだ大宮主台(片柳支台)縁辺部には貝崎貝塚(71)・宮ヶ谷塔貝塚(77)がみられる。

中期の遺跡は支台上に満遍なく展開している。真福寺貝塚(26)が中期から始まる。

後期の遺跡数は依然多く、他地域との相異が自然環境への生態学的適応から指摘されている(柿沼1993)。慈恩寺支台では裏慈恩寺遺跡のほか古ヶ場貝塚、羽鳥山貝塚がある。

晩期の遺跡は激減し、真福寺貝塚、裏慈恩寺遺跡が引き続いている。

弥生時代中期の遺跡は中期中葉所謂「須和式」の新しい段階から確認されている。元荒川沿いの南遺跡では土壌と住居跡が調査されている。その他諏訪山遺跡(横川1972)があり、春日部市の谷原新田遺跡(柿沼1976)と共に現状では最古段階の遺跡群を構成している。当該期の遺跡は県北部に比較的濃厚な分布があり、深谷市明戸東遺跡、熊谷市横間東遺跡等がある。元荒川上流部をみると池上遺跡、小敷田遺跡がある。中間流域には蓮田市宿下遺跡(高橋ほか1999)があるにすぎないが、今後沖積地の調査が進展することによって同時期の遺跡が検出される可能性がある。

中期後半宮ノ台式期になると掛遺跡、諏訪山遺跡の他、綾瀬川沿いに馬込遺跡(7)、平林寺遺跡(10)、西原遺跡等があり、各遺跡で数軒の住居跡と土壌が調査されている。見沼低地の開発が宮ノ台式期から始まること既に指摘されているが(青木1988)、綾瀬川周辺部でも同様に中期後半から始まると考えられる。

河川を通じた県北部との関係もさることながら、古利根川を越った思川流域の中期後半「上山系列」の土器が浦和市下野田西台遺跡で出土していることが指摘

されている(石川1996)。口縁部が複合乃至肥厚し縄文施文される甕形土器は、馬込遺跡4号住、17号土壌西原遺跡、浦和市谷ノ前遺跡(青木1989)でも出土し、県北部の秩父市大沼遺跡にもある。掛遺跡では波状文と刺突列が組み合わさる文様構成の壺形土器が住居跡から出土している(小川1983)。

本格的な水田農耕社会が開始されるにあたって活発な地域間の交通関係が編成されたことがうかがわれる。

弥生時代後期の遺跡は主に中頃以後で、慈恩寺支台よりも若槻支台上に多く、調査例としては馬込遺跡、平林寺遺跡、西原遺跡がある。太田貝塚周辺部では環濠集落の木曾良遺跡(石坂他1998)がある。環濠とその内部に住居跡12軒が検出され、上稲吉式、吉ヶ谷式等の土器が出土している。大宮台地周辺部で散発的に出土する吉ヶ谷式については、今後古利根川・渡良瀬川流域との関連も考慮しておく必要がある。また周辺では綾瀬川右岸の大宮主台片柳支台に深作東部遺跡群、宮ヶ谷塔遺跡群(N0155番遺跡)が知られ後期の遺跡が多数存在する。

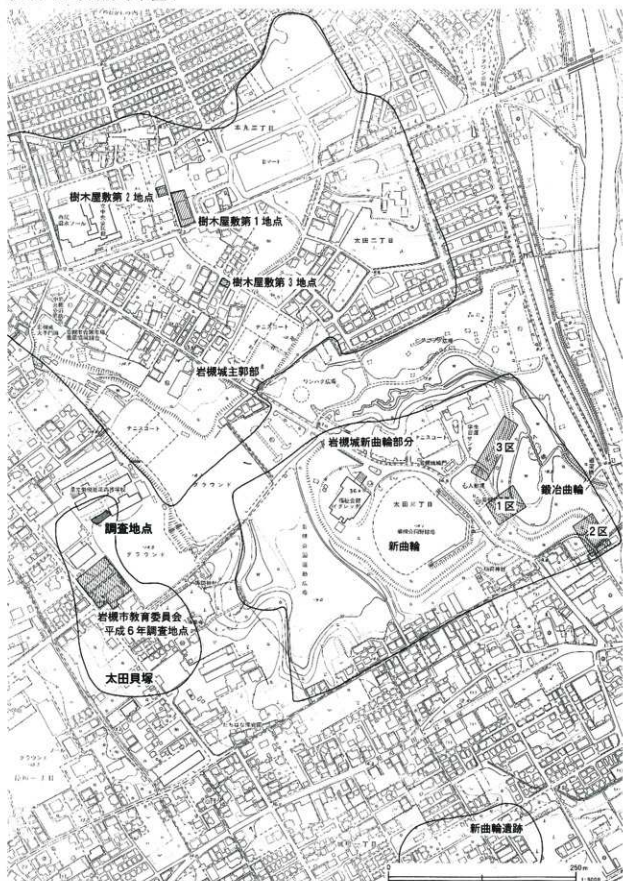
古墳時代になると前期の遺跡は支台の南半部に比較的多く確認されている。調査例は加倉遺跡、馬込遺跡、平林寺遺跡、西原遺跡がある。後期の調査例は少ないが支台全面に展開するようである。古墳はつかのこし古墳(6)、竹たば古墳(17)、浄安寺境内古墳(16)等がある。

奈良・平安時代の遺跡は支台の南半部に多い。調査例は比較的少ないが諏訪山遺跡(増田1971)では製鉄遺構が2基調査されている。

中世後期以後になると、遺跡東側の舌状台地上には岩槻城が築かれ、遺跡西側の旧諏訪小路沿いには近世の武家屋敷が形成されるようになる。

67花積北貝塚 68花積南貝塚 69花積貝塚 70黒浜貝塚群 71貝崎貝塚 72深作東部遺跡群 73深作水川神社裏遺跡
74深作稲荷台遺跡 75小深作遺跡 76小深作前遺跡 77宮ヶ谷塔遺跡 78後遺跡 79中里遺跡 80膝子八幡神社遺跡
81膝子遺跡

第3図 太田貝塚調査区位置図



Ⅲ 遺跡の概要

太田貝塚は埼玉県岩槻市太田1丁目4番地1他に所在する。元荒川右岸の大宮台地岩槻支台に立地する。遺跡の範囲は南北約220m、東西約180mの範囲である。標高は発掘調査地点で約15mを測る。

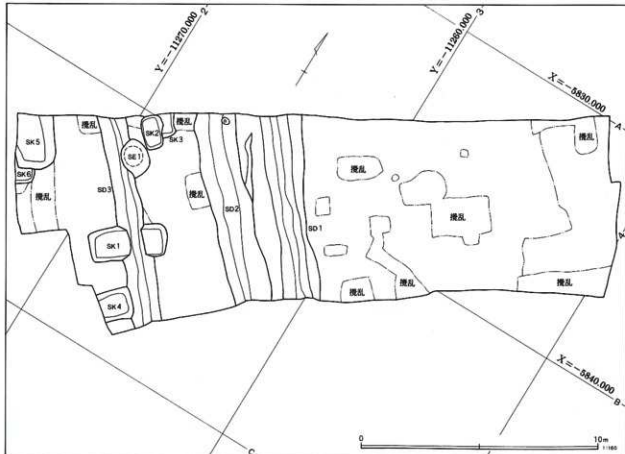
遺跡は太田貝塚の範囲の北側にあたり、地点貝塚の確認された範囲は本調査地点から150mほど南である。岩槻市教育委員会が平成6年に調査した範囲（小林ほか1997）は、商業高校グラウンドの西側に隣接する部分で、本調査地点から50mほど南である。

調査区は国家座標第Ⅱ系に基づく。北西方向から10mグリッドを設定した。グリッドの原点の座標は $X = -5,830\text{km}$ 、 $Y = -11,280\text{km}$ で、杭番号は「A-1」である。

調査の結果検出された遺構は、中世の井戸跡1基、近世の土壇6基、溝3条であった。

調査区は県立岩槻商業高等学校の校庭内に位置し、

第4図 太田貝塚全測図



全較に以前の校舎の基礎や、校庭整地時の盛り土など近・現代における攪乱が顕著で、遺構の残存状態は良好ではなかった。特に調査区の東半は攪乱等が著しく、遺構は検出されなかった。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、前期から晩期の遺物が出土していることから、太田貝塚の範囲については、現状ではその北限と考えておきたい。また遺構に伴わない混入遺物ではあるが、縄文時代から古墳時代後期の遺物が検出されたことは、今後の調査によって当該期の遺構の検出が十分予想されるところである。

近世の遺構は岩槻城関係の屋敷割りとの関連が考えられる所である。今回の調査で中世に遡る遺構、遺物が検出されたことは、近世岩槻城以前を考える上で貴重な資料となるものである。

IV 遺構と遺物

1. 遺構と遺物

(1) 井戸跡

第1号井戸跡 (第5、6図)

B-2グリッドに位置し、第3号溝跡に壊されている。平面形は略円形を呈する。規模は長径1.60m、短径1.20mで、断面筒状の素掘りの井戸である。木枠などは確認できなかった。深さは約4mまで調査を行ったが、狭小であり危険が伴うためそれ以下は調査を断念した。

出土遺物は14～15世紀の播り鉢などの陶磁器片が少量出土した。その他近世のカワラケ破片、内耳土器体部破片、板碑小破片が少量出土している。

(2) 土壌

第1号土壌 (第5、6図)

B-2グリッドに位置し、全体が調査できたのは第1号土壌だけであった。第3号溝跡を切って構築されている。

平面形は長方形で、規模は長径3.30m、短径1.43m、深さ0.50mを測る。主軸方位はN-51°-Eを指す。底面は概ね平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

出土遺物は小坏等の陶磁器破片、カワラケなどが少量出土した。

図示したものはカワラケ1点である。体部は直線的に立ち上がり、器肉はやや厚い。胎土中に赤色粒子を含む。

遺構の時期は近世と考えられる。

第2号土壌 (第5、6図)

A-2・B-2グリッドに位置し、一部調査区外に延びていた。第3号土壌と重複するが攪乱が顕著で新旧関係は確認できなかった。

平面形は長方形で、規模は長径1.42m、短径0.90m、深さ0.28mを測る。主軸方位はN-41°-Wを指す。底面は僅かに凹凸があるが、概ね平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

出土遺物は第3号土壌と混在している。板碑破片の

遺構の時期は中世と考えられる。

図示したものはカワラケ3点と中世陶器である。カワラケは体部が直線的に立ち上がるもの(焼成が良好で器壁堅緻)と、僅かに内湾して立ち上がるもの(赤色粒子を含みやや軟質)がある。器高はいずれも低く小形である。近世遺物の混入と考えられる。陶器片口鉢は口唇部内面が僅かに凸出する。片口部分が僅かに残存している。須恵質甕底部は遺存状態不良で内外面剥離が顕著である。縄文土器は2点図示した(第9図1、4)がいずれも前期で4は諸磯a式。

ほかにカワラケ小破片が少量出土している。その他縄文土器小片が出土している。

図示したものはカワラケ1点である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部が尖り気味である。器高は低い。内外面にタールが付着する。

遺構の時期は近世と考えられる。

第3号土壌 (第5、6図)

A-2・B-2グリッドに位置する。第2号土壌と重複する。

平面形は北西部分が調査区外で確認できないが、長方形を呈し、第2号土壌と同規模と考えられる。規模は現状で長径0.98m、短径0.6m、深さは0.26mとやや浅い。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

出土遺物は第2号土壌と混在し、図示したものは内耳土器が1点である。

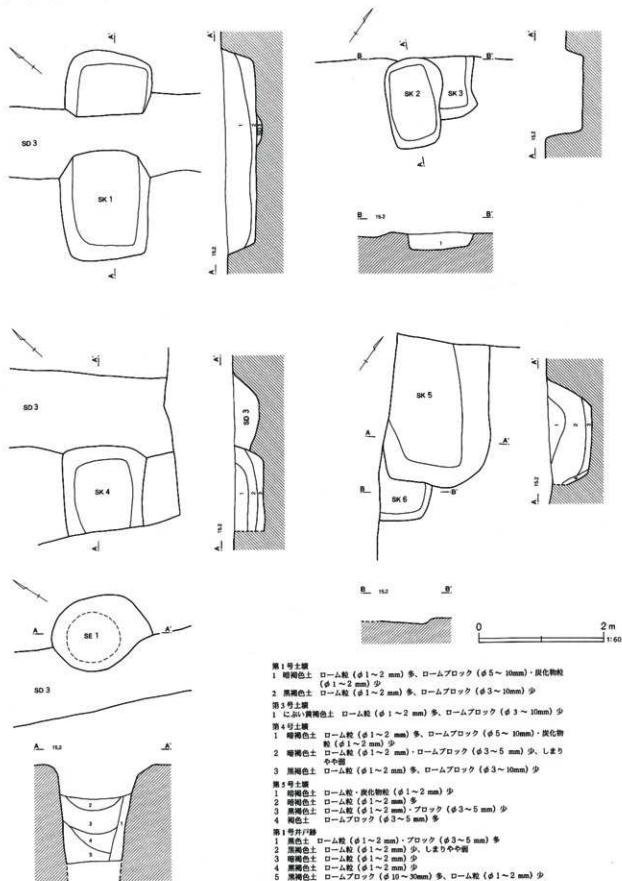
土器は内耳付近の小破片であるため口径は推定復元である。器高は5cm前後と考えられる。体部は内湾して立ち上がり口唇部外面凸状をなす。内耳は底部に付くと考えられる。外面上半部に煤が付着する。

遺構の時期は近世と考えられる。

第4号土壌 (第5、6図)

B-2グリッドに位置し、第3号溝跡と重複する。

第5図 第1～6号土壇、第1号井戸跡



平面形は西側が調査区外で確認できないが長方形を呈すると考えられる。規模は現状で長径1.34m、短径1.10m、深さ0.43mを測る。主軸方位はN-41°-Eを示す。底面は調査区際がやや深く、壁はやや傾斜して立ち上がる。

出土遺物は図示した2点の他、染め付け碗小片、カ

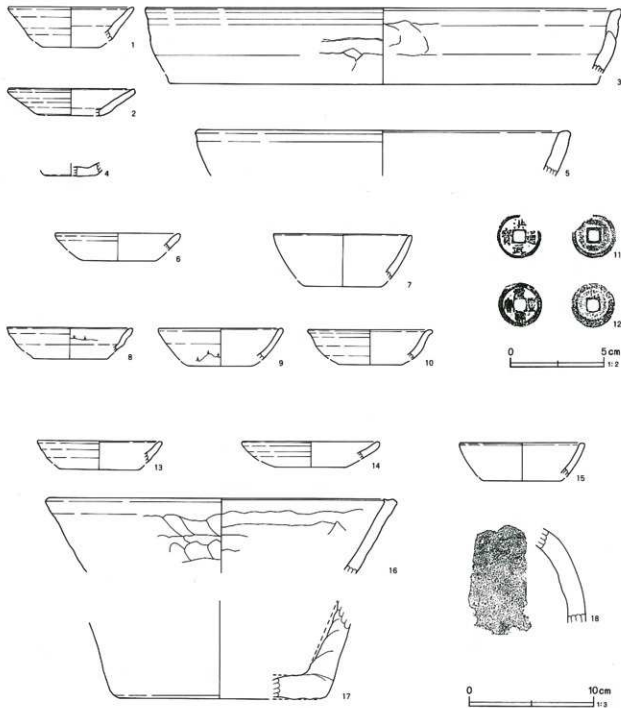
ワラケなどが出土した。

図示したカワラケ底部は胎土中に赤色粒子が目立つものである。陶器鉢は口縁部の小破片で口径は復元である。片口鉢の可能性もある。

遺構の時期は近世と考えられる。

第5号土壌 (第5、6図)

第6図 第1～5号土壌、第1号井戸跡出土遺物



B-1グリッドに位置する。第6号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は北西部分が調査区外で確認できないが長方形を呈するとみられる。南側は攪乱が及ぶ。規模は現状で、長径2.28m、短径1.64m、深さ0.69mを測る。主軸方位はN-35°-Wを示す。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

出土遺物は板碑小片、近世陶磁器、カワラケ、内耳土器などが出土した。その他「洪武通寶」、「元豊通寶」が各1点出土している。縄文土器は前期から中期のものが少量出土しているが、中期の1点(第9図6)のみ図示した。

図示した土器はカワラケ2点と陶器皿3点で、いずれも口縁部の小破片である。

第6図6、7はカワラケで6は体部が直線的に立ち上がる。7は胎土中に角閃石が目立ち色調も赤褐色で

ある。

8~10は陶器皿。8は口唇部が尖り内面上部のみ施釉される。9は体部が内湾して立ち上がり、内外面とも施釉されるが、内面上部は鉄釉である。10は体部が内湾して立ち上がり口唇部が小さく外反する。内外面とも鉄釉が施される。

第6号土壌 (第5図)

B-1グリッドに位置する。第5号土壌と重複する。平面形は、他の土壌と同様長方形を呈するものとみられる。規模は現状で、長径0.82m、短径0.63m、深さは8cmで掘りこみは極く浅い。底面は概ね平坦である。南側に攪乱が及ぶ。

出土遺物は近世陶磁器、カワラケなどが少量出土したが、図示し得るものはない。

(3) 溝跡

第1号井戸跡・第1~5号土壌出土遺物観察表(第6図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	胎付・釉薬	残存率	備考
1	カワラケ	(10.0)	2.7		D	良好		20	SK1
2	カワラケ	(10.0)	2.1	5.2	D	良好		10	SK2
3	内耳土器	(38.0)	5.1		BD素焼き	良好		5	SK3
4	カワラケ		1.0	(4.0)	D 砂質	良好		25	SK4
5	陶器鉢	(30.0)			E	良好		10	SK4
6	カワラケ	(10.0)	2.1		D	良好		5	SK5
7	カワラケ	(10.0)	3.5		D	良好		10	SK5
8	小皿	(11.0)	3.6			良好	灰釉	15	SK5
9	灯明皿	(10.0)	2.5			良好	鉄釉	5	SK5
10	小皿	(10.0)	2.3			良好	灰釉	5	SK5
11	洪武通寶							90	SK5 径2.35cm、厚さ1.5mm
12	元豊通寶							100	SK5 径2.35cm、厚さ1.5mm
13	カワラケ	(10.0)	1.8		D(多) 砂質	良好		10	SE1
14	カワラケ	(10.0)	2.7		D(多) 砂質	良好		10	SE1
15	カワラケ	(11.0)	1.3		D(多) 砂質	良好		15	SE1
16	片口鉢	(27.3)	6.0		A	良好		20	SE1 内面剥離
17	陶器底部			(16.0)	A 須恵質	良好		10	SE1 内外面剥離
18	常清壺					良好	鉄釉		SE1 中・下層出土

第1号溝跡(第7、8図)

第1~3号溝跡は、南東-北西方向にはほぼ平行して走行している。

第2号溝跡と並行して北西から南東に走行する。走行軸はN-40°-Wである。規模は、現在長7.80m、幅2.18m、深さ0.49m、底面幅60cm前後でやや狭い。断面形は逆台形状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は中世陶器瀬戸・美濃系摺り鉢、板碑破片の他、近世陶磁器碗類、皿類、染め付け小碗、カワラケ、内耳土器、素焼き鉢などの破片が少量出土した。

縄文土器は5点出土しているが図示に耐えるものは3点(第9図7~9)で8が中期、他は後期以後である。

1はカワラケで体部が僅かに内湾して立ち上がる。胎土中に赤色粒子が目立つ。

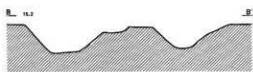
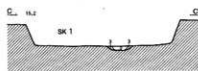
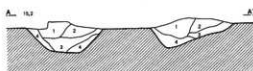
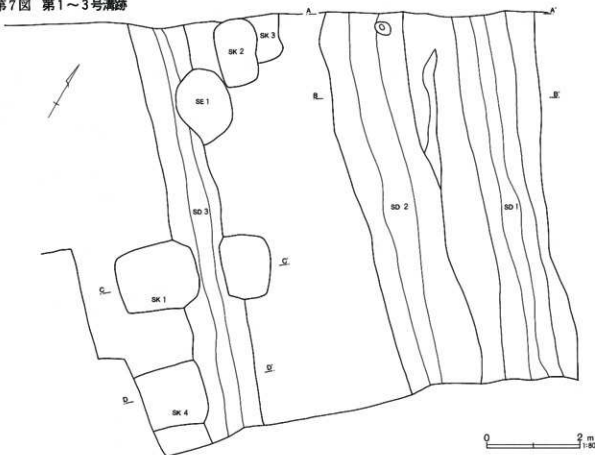
2はカワラケ底部で僅かに凸出する。

3は灯明皿で底部は上げ底気味。内面鉄釉が一部外面口縁部下に及ぶ。焼成良好、器壁堅緻。

4は端反碗で内外面ともに灰釉亀裂釉が施される。

5は陶器攪り鉢の体部小片で外面に輪積み痕が明瞭に残る。条線は左回りに施され単位は4本/1cm、断

第7図 第1～3号溝跡



- 第1号溝跡
- 1 黄褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 少、しまりや中細
 - 2 黒褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 少
 - 3 灰褐色土 ローム粒 (φ1~2mm)・ブロック (φ3~5mm) 少
 - 4 黒褐色土 ローム粒 (φ1~2mm)・ブロック (φ3~5mm) 多

- 第2号溝跡
- 1 褐色土 ローム粒・炭化粒 (φ1~2mm) 少、しまりや中細
 - 2 暗褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 少、しまり細
 - 3 黒褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 少
 - 4 暗褐色土 ロームブロック (φ3~10mm) 多 (地山崩壊土)

- 第3号溝跡
- 1 黄褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 多
 - 2 黒褐色土 ローム粒 (φ1~2mm) 多
 - 3 黄褐色土 ロームを主体とする (地山崩壊土)

面箱型である。胎土中に砂粒が目立つ。

第2号溝跡 (第7、8図)

第1号溝跡と並行して北西から南東に走行する。走行軸はN-42°-Wである。第1号溝跡との間隔は北西側で2.1m南東側で約1mの距離がある。規模は、現

在長8.00m、幅1.50～1.68m、深さ0.48mを測り、僅かに南側に傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。

出土遺物は常滑甕片、板磚小片の他、近世陶磁器碗、皿類、鉢、染め付け碗、皿類、カワラケ、播り鉢、内耳土器、素焼き鉢などが出土した。

6～8はカワラケ。6は体部が僅かに内湾して立ち上がる。7はほぼ直線的に開き、口唇部が尖り気味。8は底部で厚い。

9は陶器灯明皿。内面から底部外面付近まで鉄軸が及ぶ。

10は香炉口縁部小片。

11は陶器土瓶蓋で、外面のみ鉄軸が施される。

12は染め付け蓋物蓋。2条の圏線内に水辺風景が描かれる。

13は丸形小碗で灰釉亀裂釉が内面から外面高台付近まで及ぶ。

14は半球形の小碗。花紋が対角線上に配される。「大明年製」の銘がある。

15は浅半球形の小広東碗。外面1条の圏線間に3段に亘って連鎖文が描かれる。内面は口唇部下2条、底面1条の圏線が巡る。

16は腰折形の小碗で口縁部は湾曲気味。内外面とも鉄釉と灰釉の掛分け。

17は半筒形の小碗。菊格子目文。

18は大皿底部で中世陶器。

19は常滑甕底部。

20は内耳土器口縁部小片。口唇部内面やや凸状をな

す。

22は硯の小破片。21、23は砥石。

第3号溝跡(第7、8図)

第1号溝跡、第2号溝跡の西側に位置し、並行して北西から南東に走行する。走行軸はN-41°-Wである。第1号井戸跡を切り、第1、4号土壌によって切られる。規模は、現在長9.00m、幅0.98～1.28m、深さ0.40mを測り、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は中世陶器の鉢体部、底部および播り鉢体部片、常滑甕小片の他、近世陶器、カワラケ、内耳土器底部片が少量出土した。その他土師器甕口縁部片が出土している。第3号溝跡は、中世の遺物が少量含まれており所屬時期は他の溝跡より遅る可能性がある。

縄文土器は少量出土しているが図示し得るものは3点(第9図2、5、10)で、2か前期、5か勝坂式、10は晩期安行式か。

カワラケは4点(24～27)図示した。

24は内湾して立ち上がる。器肉はやや厚い。胎土中に砂粒が目立つ。

25は口唇部が僅かに肥厚し、端部は丸く収まる。胎土中に赤色粒子が含まれる。

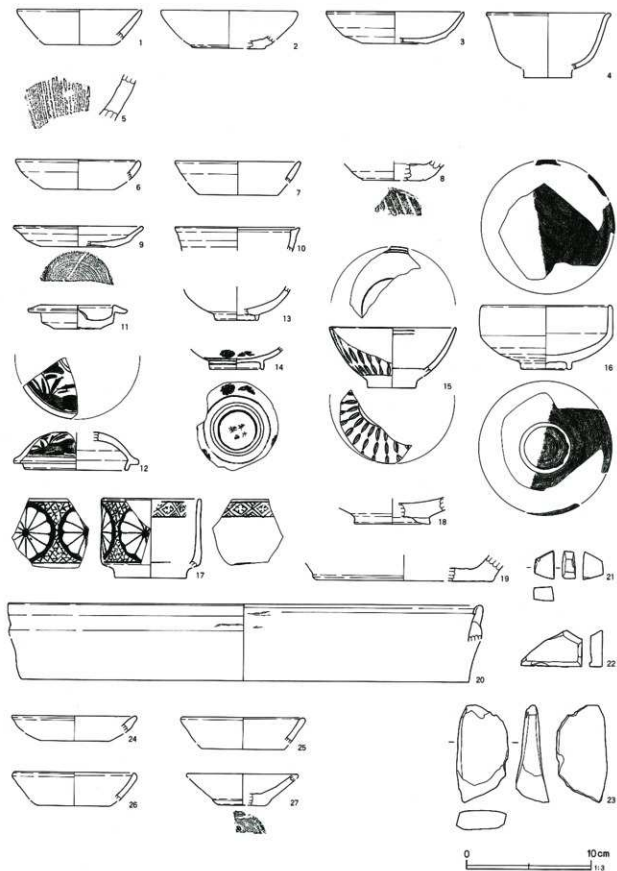
26は直線的に開くもので口唇部が尖り気味である。胎土は精良である。

27は底部で厚く、体部はほぼ直線的に開く。胎土中に赤色粒子が目立つ。

第1～3号溝跡出土遺物観察表(第8図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	絵付・釉薬	残存率	備考
1	カワラケ	(10.0)	2.4		D	良好		10	SD1
2	カワラケ			5.8	D	良好	鉄軸	15	SD1
3	灯明皿	11.0	2.5	5.0	陶器	良好		25	SD1
4	端反碗	(10.0)	4.4		磁器	良好		20	SD1
5	播り鉢				A 陶器	良好			SD1
6	カワラケ	(10.0)	1.5		D	良好		10	SD2
7	カワラケ	(10.0)	1.6		D	良好		10	SD2
8	カワラケ		1.5	4.0	D	良好		35	SD2
9	灯明皿	10.2	1.6	5.6	陶器	良好	鉄軸	40	SD2
10	香炉	(10.0)	1.9		D 陶器	良好		15	SD2
11	土瓶蓋	8.0	1.8	5.6	陶器	良好	鉄軸	30	SD2
12	蓋物蓋	(10.0)	3.0		磁器	良好		染付	20
13	小碗		2.7	3.2	磁器	良好	灰軸	45	SD2

第8図 第1～3号溝跡出土遺物



No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	絵付・施装	残存率	備考
14	小碗		1.8	4.2	磁器 備前系	良好	染付	30	S D 2
15	小広東碗	(10.0)	3.8		磁器 備前系	良好	連続文	5	S D 2
16	腰折れ碗	(10.0)	5.1	4.1	陶器 瀬戸・美濃系	良好	鉄・灰釉	20	S D 2
17	小碗	(7.8)	5.4		磁器 備前系	良好	菊格子目文	15	S D 2
18	陶器皿		2.7	8.0	陶器 瀬戸・美濃系	良好		25	S D 2 内面施釉
19	陶器底部		2.1	14.0	中世陶器	良好		20	S D 2
20	内耳土器	(38.0)	3.0		素焼	良好		5	S D 2
21	砥石								S D 2 全面使用
22	硯								S D 2
23	砥石								S D 2
24	カワラケ	(10.0)	1.3		D	良好		10	S D 3 風化顕著
25	カワラケ	(10.0)	2.0		D	良好		5	S D 3
26	カワラケ	(9.6)	2.1		D	良好		10	S D 3
27	カワラケ		2.4	4.0	D	良好		25	S D 3

(4) その他の出土遺物

調査区内からは、表面採集された遺物および後世の攪乱中に混在した遺物が検出された。

第9図は各遺構出土及び表採された縄文土器と表採、攪乱出土の中世・近世の遺物である。

表採遺物 (第9図)

土師器甕片の他、中世陶器鉢、常滑大甕片、板碑小破片が出土している。

近世の遺物は染め付け筒形小碗、天目茶碗、灰釉小碗、内耳土器、素焼き鉢、カワラケ等が出土している。

3は縄文土器で前期。

11～14はカワラケである。胎土はいずれも赤色粒子が目立つ。

13, 14は体部が直線的に開き、底部外面が凹むもので、11も同様の底部形態である。

12はほぼ平底の底部で、外反気味に立ち上がるとみられる。

攪乱出土遺物 (第9図)

土師器甕片、黒曜石片等が出土している。

縄文土器表採及び攪乱出土遺物観察表 (第9図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1					D	普通			S E 1
2					E	普通			S D 3
3					E	普通			表採
4					D	普通			S E 1
5					D E	普通			S D 3
6					D	普通			S K 5
7					E	普通			S D 1
8					D	普通			S D 1
9					E	普通			S D 1

近世の遺物は陶磁器小碗、土瓶、大皿、灯明皿、壺等の他、カワラケ、内耳土器片、砥石が出土している。

その他「至道元寶」(30)が1枚出土している。

15～18はカワラケである。15は器壁が薄く口唇部内外面にタールが付着する。体部は直線的に開く。他は器壁が厚く、16～17は体部が内湾して立ち上がる。

19は灯明受皿で内外面とも鉄釉。20～21は灯明皿でいずれも鉄釉が施される。

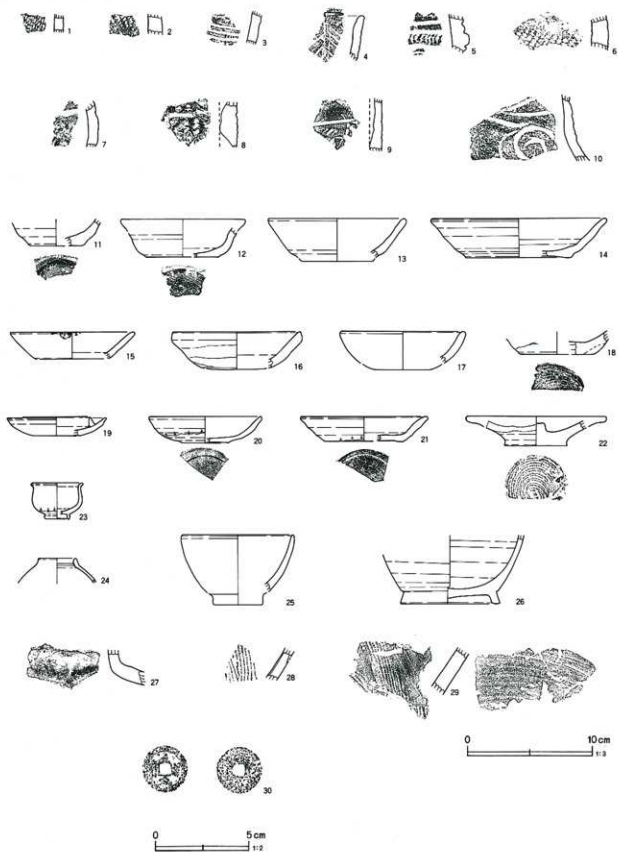
22は土瓶蓋で外面に鉄釉が施され、一部外面に及ぶ。

23～25は灰釉(亀裂釉)が施され、23は甕形の小碗、24は扁平形の髪油壺、25は小碗。26は壺類底部で内外面に灰釉が施される。

27は常滑甕の頸部片。

28, 29は播り鉢破片である。28は素焼きの播り鉢体部片で、条線単位は4本/1cm。近世から近代の所産。29は陶器播り鉢で条線単位は4本/1cm。内外面鉄釉が施される。17世紀代。

第9図 縄文土器、表採及びび攪乱出土遺物



No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	絵付・釉薬	残存率	備 考
10					C	普通			S D3
11	カワラケ		2.1	4.0	D	良好		25	表採
12	カワラケ		2.3	(4.8)	D	良好		20	表採
13	カワラケ	(11.0)	3.0		D	良好		15	表採
14	カワラケ	(13.6)	3.1	8.4	D 砂質	良好		20	表採
15	カワラケ	(10.0)	2.1		D	良好		5	口径タール付着、攪乱
16	カワラケ	(10.5)	2.9	5.0	ABD	良好		20	攪乱出土
17	カワラケ	(10.0)	2.2		D	良好		15	攪乱出土
18	カワラケ		1.8	6.0	D (多) 砂質	良好		25	攪乱出土
19	灯明受皿	(7.8)	1.5	3.8	陶器	良好	鉄軸	20	一部タール付着、攪乱
20	灯明皿	9.0	2.0	3.8	陶器	良好	鉄軸	25	攪乱出土
21	灯明皿	10.2	1.9	6.2	陶器	良好	内外顔鉄軸	25	攪乱出土
22	土瓶蓋		2.0	5.0	陶器	良好	鉄軸	30	攪乱出土
23	小碗	4.0	3.0	2.0	陶器	良好	灰軸	30	攪乱出土
24	梨油壺	(3.0)	1.9		陶器	良好	灰軸	15	攪乱出土
25	小碗	9.0	4.5		磁器	良好	灰軸	25	攪乱出土
26	壺底部		5.4	8.0	陶器	良好	灰軸	80	攪乱出土
27	常滑甕				陶器	良好	鉄軸		攪乱出土
28	摺り鉢				素焼	良好			攪乱出土
29	摺り鉢				陶器	瀬戸・美濃系	鉄軸		攪乱出土
30	至通元寶								攪乱 径2.35cm、厚さ1.5mm

遺構計測値一覧表

遺構番号	長径	短径	深さ	主軸方位	グリッド番号
第1号井戸跡	1.60	1.20	4.00	N-42°-W	B-2
第1号土壇	3.30	1.43	0.50	N-51°-E	B-2
第2号土壇	1.42	0.90	0.28	N-41°-W	A-2, B-2
第3号土壇	0.98	0.60	0.26	-	A-2, B-2
第4号土壇	1.34	1.10	0.43	N-41°-E	B-2
第5号土壇	2.28	1.64	0.69	N-35°-W	B-1
第6号土壇	0.82	0.63	0.08	-	B-1
第1号溝跡	7.80	2.18	0.49	N-40°-W	A-2, B-2, B-3
第2号溝跡	8.00	1.68	0.48	N-42°-W	A-2, B-2
第3号溝跡	9.00	1.28	0.40	N-41°-W	B-1, B-2

V 結 語

(1) 出土遺物について

1. 中世の遺物

出土した中世陶器はいずれも小破片で、器種は播り鉢、鉢、甕等が出土している。板碑については小破片のみで年号等は全く不明である。

瀬戸・美濃系播り鉢と産地不明の片口鉢は、14～15世紀代とみられ、須恵質鉢底部も同様であろう。

常滑系甕は全て小破片で器形復元できるものはないが、15世紀代と考えられる。

2. 近世の遺物

陶磁器

肥前系小碗、筒形小碗、塗り分け碗はいずれも18世紀後半以後の様相を示す。連鎖文の小広東碗は18世紀後半～19世紀前葉のもの（池田1995、佐々木1990）と類似している。受付き灯明皿は御先祖組屋敷等で出土しており19世紀初頭とされる（中山ほか1997）。端反碗の存在もあり後葉に近い時期と考えられる。その他小片であるが唐津系の皿が出土している。

内耳土器

出土したものは内耳部分が完全に底部に付着するもので、極く新しい段階のものである。

ガラス

図示した総点数は25点である。完形個体は1点もなく、ほとんどが小破片で復元実測である。

法量については正確さを欠くが、あえて分類すると口径は大・小2種類あり、大部分が小形の口径10cm前後のもので、大形は口径14.2cmの表採遺物1点のみである。器高については2点しか分からないため、はっきりしないが分かるものについては3cm前後である。

器壁が厚いものと薄いものが存在する。底部についても同様である。

体部の立ち上がりは直線的に立ち上がるものと内湾気味に立ち上がるものがある。

口唇部形態は多様で丸く収まるもの、肥厚するもの、

尖り気味なもの、内削ぎ状なもの、外削ぎ状なものが存在する。

底部についても残存個体数が少ない。平底ないし僅かに上げ底なものが主体で、僅かに凸出気味である。外周部分がナデによって凹むものと、そのまま底部に移行するものがある。

胎土は赤色粒子を含むものが大部分である。

カワラケそのものによる時期決定は困難である（佐々木1990）とされるが、全体に口径、器高ともに小形化が進んでおり近世陶磁器の示す年代観と齟齬はないと考えられる。

(2) 遺構について

ここでは、今回の調査で検出された遺構について若干の検討をしておきたい。各遺構に関する記述の便宜上、本文内と重複する場合もあるが敢えてそのままとした。面積350²mという、きわめて限られた調査範囲内で検出された遺構は、中世の井戸跡1基、近世の土塋6基・溝跡3条である。

井戸跡

井戸跡は3号溝跡に切られている。井戸跡の平面規模は1.6m×1.20mで、略円形を呈する。井戸壁面が崩落する危険性があり、確認面から4mまで掘り下げ、それ以下については断念した。そのため、深さについては不明である。断面形態は円筒形を呈する。井戸は素掘りで、木枠などの施設は検出されておらず、その痕跡もみられなかった。

遺物は、14～15世紀の播り鉢はかが出土しており、近在する岩槻城一室町末期の長祿元年（1457）築城と伝えられる一に先行する井戸跡の可能性が高い。

調査区境界線に近いため周囲の状況は不明であるが、井戸跡周辺にはピットは検出されていない。この井戸跡は覆屋をもたないものと思われる。なお、この井戸跡の近辺に建物の存在が想定されるが、調査範囲内においてはその痕跡はみられなかった。但し、近世以降の段階で、これらの痕跡が失われた可能性も考え

られる。

土壌

土壌は、土壌同士で重複していたり、調査範囲外に続くものが多いため、流量などの詳細は不明である。規模は、概ね長径1～3.3m・短径0.6～1.6mの長方形を呈し、深さは0.3～0.6m程である。方位的には1～3号溝に沿うものと、直行するものがあり、溝の方位を意識していると思われる。溝跡との重複関係においては、いずれも土壌が溝跡を切っている。土壌の性格については、遺構の規模・形態、出土遺物の内容などからみて、いずれも近世の土葬墓と考えられる。

溝跡

溝跡は各々直線状に走り、平行する。溝跡同士の間隔は、1号溝跡—2号溝跡間で1～2.1m、2号溝跡—3号溝跡間で2.8～3.2mである。

1号溝跡は上面幅約2.2m・底面幅約0.6m・深さ約0.5mで、断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。

2号溝跡は幅1.5～1.7m・深さ0.5mで、断面形は逆台形を呈する。3号溝跡は幅1.0～1.3m・深さ0.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。

各溝跡とも遺物の出土はきわめて少ないが、18世紀後半～19世紀前半と推定される遺構である。溝跡の土層断面（第7図）から流水の痕跡は窺えず、用排水路の可能性はない。性格としては、区画溝とみるのが妥当であろう。

調査地点の位置と各遺構の性格

17世紀中頃～後半の姿を描いたと推定されている「岩槻城跡絵図」（埼玉県1987）をみると、岩槻城本丸の南西部には、広く武家屋敷が配された一画がみられ、その西側には町屋が広がり、さらにその外側には寺域が展開している。そして、武家屋敷地の北は寺域となり、東～南にかけては堀を挟んで畑地となっている。

発掘調査区は、現在も北西—南東に通る市道として痕跡をとどめる近世の諏訪小路から、70m程北東（本

丸側）に奥まった地点に相当すると思われる。そしてこの一帯は、本丸の周囲を巡る堀に、寺域（正福寺）を挟んで最も近い位置に該当する。

では、今回の発掘調査区は、具体的にどこに当たるのか。同絵図をみると、諏訪小路北東側（本丸側）の武家屋敷地の並びと堀との間には、北から正福寺・諏訪宮・浄源寺・梅照院が連なっているのがわかる。そして、この武家屋敷地と寺域との地境は、諏訪小路とほぼ並行するように表現されている。

今回の調査地点は、絵図の中では既述「多田五郎左右衛門」屋敷地から「三百石荒井忠左右衛門」屋敷地、そして正福寺の寺域の一部をまたぐ廻りと思われる。

絵図と検出遺構との対応関係については、慎重の上にも慎重を期すべきであるが、現状の遺構で確実性をもつ遺構は、岩槻城の城郭部分と大溝の部分である。

近世の諏訪小路について、岩槻城の城郭部分と大溝の位置関係を較べてみると、絵図と推定位置とは微妙な食い違いがあり、現推定位置では、小路北側の武家屋敷地の地割りが絵図よりも狭くなる。

測量図ではなく絵図と、地形図や遺構実測図とを直ちに対応させること自体に無理がある。しかも、絵図の描かれた時期と、出土遺物の示す遺構の時期が異なるのであればなおさら無理が伴わざるを得ない。

つまり17世紀代の絵図に示された地境と、出土遺物の示す18世紀後半以降の溝跡とを対応させ、関連づけで考えることは危険である。

今回の調査で検出された3条の溝跡は、いずれも既述のように用排水溝の可能性がなく、方向的に諏訪小路に平行している。この2点から、1つの可能性として、溝跡は屋敷地と寺域との地境の溝であると考えておきたい。複数の溝跡が存在する点については、地境の移動を示しているのであろうか。そして単に溝跡のみではなく、これらの溝と溝の間には、道の存在もあり得るのではなからうか。言い換えるならば、側溝をもつ道が地境に通っていた可能性も考えられよう。

しかし溝跡が3条あることから、仮に側溝であるとしても片側が（道路幅などにより）移動したとも考えられる。

かつて諏訪宮の北側、諏訪小路に沿う武家屋敷地の並びにあたる地点で、岩槻市教育委員会による調査が行われたことがある（小林照教ほか1997）。その際には溝跡・土壌・掘立柱建物跡のほか、多数のピットが確認されている。

今回の当事業団の調査区は、岩槻市教育委員会の調査区から南へ約50m、しかも同じ諏訪小路北側の並びに位置した屋敷地とみられるにも関わらず、溝跡と土壌以外は検出されていない。このような遺構の種類・数の違いは何に由来するのか。あるいは、両地点における土地の利用の仕方に大きな違いがあったことを示しているのだろうか。

道に沿う側溝や道の拡幅、あるいは地割り溝とその移動など幾つかの可能性を考えたが、いずれにしても武家屋敷地と寺域とを画する位置にあったのではないかと考えておきたい。

具体的な根拠はないが、土葬墓を武家屋敷地内に独自に何基も掘るとは考えにくい。ましてや、ごく近隣に寺社がある場合、なおさら屋敷地内の土葬墓群は考えにくいと思われる。

今回検出された6基の土壌はいずれも土葬墓であり、屋敷地北側は寺域となっている。このことから、本調査区は屋敷地北隣に存在した正福寺の寺域である蓋然性が高い。

引用・参考文献

- 青木義伸 1988 『上野田西台遺跡（第4次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第108集 浦和市遺跡調査会
- 青木文彦 1996 『岩槻城関連遺跡群発掘調査報告書』埼玉県岩槻市教育委員会
- 青木文彦ほか 1997 『埼玉県指定史跡岩槻城・鍛冶曲輪周辺地区』岩槻城関連遺跡群発掘調査報告書2 岩槻市文化財調査報告書第19集 埼玉県岩槻市教育委員会
- 青木文彦・小林照教・増田雄一・関根俊雄 1998 『松江鎗金遺跡第3地点・慈恩寺山口南遺跡・岩槻城跡樹木屋敷第2地点・松江鎗金遺跡第4地点・岩槻城跡樹木屋敷第3地点』平成9年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書 埼玉県岩槻市教育委員会
- 青木文彦・増田雄一 1999 『笹久保宮野遺跡発掘調査報告書—近世土坑墓群の調査—』埼玉県岩槻市遺跡調査会
- 井汲隆夫ほか 1992 『東京都新宿区 内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』新

先に述べた岩槻市教育委員会の調査区と、当事業団の調査区における検出遺構の種類・数などの相違点は、屋敷地と寺域の違いの反映であろうか。

但し、本調査区が寺域内であるとするならば、武家屋敷地との地境とみた溝を切っていたり、溝よりも西（武家屋敷地）側にも存在するのはなぜか。この点については、以下のように2つの可能性が挙げられる。

- 1: 17世紀代の絵図にみられる地境よりも、寺域が西（武家屋敷地）側に拡大した。
- 2: 絵図にみられる諏訪小路が、現在に残る諏訪小路と微妙にずれているように、絵図が位置・規模などに厳密性をもたせたものではないことから生ずる対応関係のずれによる。

1については、3条の溝跡も拡大の傍証であろうか。その場合、寺域からみて最も外側にあたる3号溝跡を切っている1・4号土壌や、さらに外側に位置する5・6号土壌も取り込んだ溝跡が、調査範囲外に存在するのかも知れない。

2については、今回の調査区のみからは検出できない。また現実とのずれが生じる場合でも、絵図に描かれた建物や施設的位置・重要度によって精度がまちまちとなることも想定される。調査事例の増加を待って、検証されるべき問題といえる。

中世の遺構は井戸跡1基で、たまたま深い遺構であったため残ったが、井戸跡が帰属した建物・施設は、近世段階には失われたと思われる。そのため、この井戸跡の帰属については、不明といわざるを得ない。

- 宿区内藤町遺跡調査会ほか
- 池田悦夫 1995 『東京都新宿区 市谷本村町遺跡 尾張藩徳川家上屋敷跡—(仮称)警視庁半身待機
宿舍服達寮建設に伴う緊急発掘調査報告書—』新宿区市谷本村町遺跡調査団
- 石川日出志 1996 『東日本弥生中期広域編年の概略』『YAY』弥生土器を語る会
- 石坂俊朗ほか 1998 『木曾良遺跡の研究(1)—弥生時代の環濠集落を中心に—』『研究紀要』第14号
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩槻市遺跡調査会 1980 『岩槻城跡土器調査報告書』岩槻市文化財調査報告書第10号 岩槻市遺跡調査会・岩
槻市教育委員会
- 上田 真 1990 『第七章かわらけの編年学的及び機能論的考察』『東京大学構内の遺跡 法学部4号
館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学遺
跡調査室編
- 扇浦正義ほか 1988 『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会
- 大橋康二 1989 『備前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 小川良祐 1983 『岩槻市史』考古資料編 岩槻市役所市史編さん室
- 小倉 均 1988 『上野田西台遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第73集 浦和市遺跡調
査会
- 柿沼幹夫 1976 『埼玉県土器集成4縄文晩期～弥生中期』埼玉考古学会
- 柿沼幹夫ほか 1993 『中川水系Ⅲ人文』中川水系総合調査報告書2 埼玉県
- 小林照教・青木文彦 1988 『新曲輪遺跡・木曾良貝塚第2地点・桜山貝塚第2地点・金重西遺跡・真福寺中道遺
跡第2地点』埼玉県岩槻市内遺跡群埋蔵文化財の調査(2) 岩槻市文化財調査報告
書第13号 岩槻市教育委員会
- 小林照教・青木文彦 1992 『岩槻城樹木屋敷跡』平成3年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書 埼玉
県岩槻市教育委員会
- 小林照教・青木文彦 1993 『岩槻城樹木屋敷跡発掘調査報告書』埼玉県岩槻市遺跡調査会
- 小林照教・青木文彦 1994 『笹久保スクモ遺跡・浮谷貝塚第2地点』平成5年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書
埼玉県岩槻市教育委員会
- 小林照教・青木文彦・関根俊雄 1995 『寒徳恩寺連台遺跡・馬込三番北遺跡・飯塚南貝塚』平成6年度岩槻市内遺
跡発掘調査報告書 埼玉県岩槻市教育委員会
- 小林照教・青木文彦・増田雄一・関根俊雄 1997 『太田貝塚遺跡発掘調査報告書 縄文時代編』埼玉
県岩槻市遺跡調査会
- 小日置能生子ほか 1990 『白鷺』都立白鷺高校内埋蔵文化財発掘調査報告書 都立学校遺跡調査会
- 佐々木 彰 1990 『「第四節江戸時代のカワラケの動態と推移—大聖寺藩上屋敷跡出土の資料を中心
に—』『東京大学構内の遺跡 医学部付属病院地点—医学部付属病院中央診療棟・設備
管理棟・給水設備棟・教員講義棟—』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3
東京大学遺跡調査室編
- 高橋一夫ほか 1999 『蓮田市史』考古資料編Ⅱ古代・中世資料編
- 中島 宏ほか 1987 『荒川 人文Ⅰ』荒川総合調査報告書2 埼玉県
- 中村倉司ほか 1982 『新編 埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 埼玉県
- 中山経一・時国貞夫 1997 『駒込縄縄手 御先手組屋敷—都立向丘高校地点における埋蔵文化財発掘調査報告
—』都内遺跡調査会
- 長佐古真也 1993 『「受けき灯明皿」にみる生産と流通—受皿の形式分類と量的把握を通して—』東京
都埋蔵文化財センター研究紀要XⅡ 東京都埋蔵文化財センター
- 長佐古真也 1994 『和泉伯太藩上屋敷跡』地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書1 地下鉄7
号線溜池・駒込間遺跡調査会
- 増田逸朗他 1971 『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査報告第
8集 埼玉県遺跡調査会
- 柳田敏司他編集 1979 『日本城郭体系』第5巻 埼玉・東京 新人物往来社
- 柳田敏司・庄野靖寿・青木義徳 1966 『岩槻市新曲輪遺跡調査報告』埼玉考古第4号 埼玉考古学会
- 横川好富他 1972 『加倉・西原・馬込・平林寺』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 埼玉
県・埼玉県遺跡調査会

写真図版



岩槻城周辺 (昭和22年撮影米軍写真約1/10, 150)



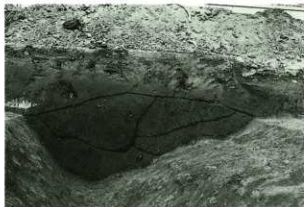
調査区全景（北側から）



第1号井戸跡土層断面



第5号土層土層断面



第1号溝跡土層断面



第2号溝跡土層断面



第4号土層、第3号溝跡土層断面



第1号井戸跡、第2、3号土層全景



第1号土層全景



第2、3号土坑全景



第4号土坑全景



第5、6号土坑全景 (東側から)



第1～3号溝跡全景 (西側から)



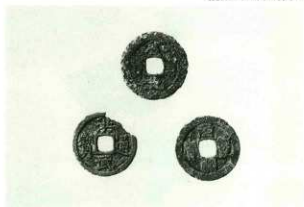
第2号溝跡出土腰折れ碗



捜乱出土灯明受皿



捜乱出土カワラケ



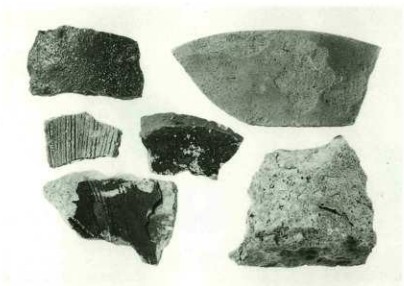
第5号土坑、捜乱出土古銭



第2号溝跡出土染付小碗、蓋



第1、2号溝跡出土陶器



第1号井戸跡他出土中世陶器

報告書抄録

ふりがな	おおたかいづか							
書名	太田貝塚							
副書名	県立岩槻商業高等学校防災拠点整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第244集							
編著者名	磯崎 一							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村新木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2000(平成12)年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたかいづか 太田貝塚	埼玉県大里郡大里村新木台4丁目4番地1他	1123	77063	35°56'50"	139°42'30"	19981216～ 19990131	350	防災拠点施設設備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
太田貝塚	集落跡	中世・近世	井戸跡 土壇 溝跡	1基 6基 3条	縄文土器 土師器 須恵器 カワラケ 陶磁器 古銭 石製品			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第244集

岩槻市

太田貝塚

県立岩槻商業高等学校防災拠点整備事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

平成12年1月15日 印刷
平成12年1月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1
電話 0493(39)3955

印刷／誠美堂印刷株式会社